



Title	『ビラウハルとブーザーサフ物語』の補遺：三つの 仏教説話
Author(s)	竹田, 新
Citation	大阪外国語大学論集. 1990, 2, p. 207-231
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79486
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『ビラウハルとブーザーサフ物語』の補遺

—三つの仏教説話—

竹 田 新

I. はじめに

アラビア語圏に伝わった仏教説話としてはビラウハル(Bilawhar)とブーザーサフ(Bûdhâsaf)の話がつとに有名である¹⁾。この話は更にヨーロッパ・キリスト教世界にも伝わり、聖 Barlaam と聖 Ioasaph (或は聖 Josaphat) の話となっている²⁾。

さて、現在この“ビラウハルとブーザーサフ物語”のアラビア語版として伝わっている主要なものは、Ibn Bâbawayhi (或はIbn Bâbûyeh) による翻案、Halle抄略版、Bombay石版の3点である³⁾。このうち最も古いと言われるもの⁴⁾、即ちイスラム教のIthnâ‘Ashariya(12イマーム派)のhadîth (伝承) 学者でヒジュラ暦381 /西暦991年に没した、Ibn Bâbawayhiの名で知られるAbû Ja‘far b. Bâbawayhi al-Qummî as-Sadûq がこの派の教義に関する作品K. Ikmâl ad-Dîn wa-Itmâm an-Ni‘ma fî Ithbât al-Ghayba wa-Kashf al-Hayra『隠蔽を確認し、困惑を晴らすための、宗教の完成と恩寵の完遂』(以下、K. Ikmâl ad-Dîn『宗教の完成』と略記) 中に取り入れた“ビラウハルとブーザーサフ物語”には、他の2書、更にはヨーロッパに伝わった“BarlaamとIoasaph物語”に登場しない説話が二つと、他とは異なる説話の一つ挿入されている⁵⁾。

本稿では、この特異な3話を訳出・紹介してみる。底本としたものは、S.M.SternとS.Walzerが、Manchester写本802(1041/1632年)、Berlin写本2721(1082/1671年)、Teheran石版(1301/1883-84年)そしてMajlisî(1111/1699-1700年没)のシーア派百科Bihâr al-Anwâr第17巻(Teheran石版1304/1886-87年)を利用して校訂したテキスト(*Three unknown Buddhist stories in an Arabic version*, Oxford, 1971, pp.15-37)である⁶⁾。

II. 第 1 話

語り伝えられるところによりますと⁷⁾、昔、学識で名が轟く、心の優しい王がおり、国民の間に正義を拓げること、臣民に善行を施すことを願って、政を行なっておりました。王はこうした政によって幸せな治世を送った後、亡くなり、国民の嘆き悲しむところとなりました。亡き王の妃の一人が身籠っておりましたが、星占い師達や予言者達はお腹の子は男児であろうと言いまし

た。そして政は、亡き王の治世中、任されていた者がそのまま切り回しておりました。星占い師や予言者の言ったとおり、かの妃から男児が生まれました。人々はその誕生を祝って、楽器を奏で、お祭り騒ぎをし、飲んだり食べたりして、1年を過ごしました。

それを見て、識者や法学者、神学者は民衆に言いました。

「このわ子様がいと高くおわす神⁸⁾からの賜り物ならば、おまえ達は感謝を神以外の者に行っていることになるぞ。もしわ子様が至高至大におわす神以外の者からの贈り物ならば、わ子様を与えてくれた者に対して義務を果たし、わ子様を恵んでくれた者への感謝に励んでいることになるが」

民衆は答えました。

「私達にわ子様を授けたもうたのは、いと尊くいと高くおわす神に他なりません。その他の者が与えてくれるはずがありません」

「だが、至高至大におわす神がおまえ達にこのわ子様をお授けくださったお方であるならば、おまえ達は王子様をお授けくださったお方ではない者を喜ばせ、お授けくださったお方が怒りたもうようなことをしてかしたのだぞ」

「それでは賢者の皆様、私達に指し示してください。学者の皆様、私達に教えてください。そうすればお言葉に従い、ご忠告を受け入れましょう。私達に指図してください」

「楽器を奏でたり、お祭り騒ぎをしたり、酔っ払ったりして、悪魔⁹⁾を喜ばせるようなことは控え、至高至大におわす神が喜ぶたもうことを求め、お授けいただいたわ子様のことを、悪魔に感謝した何倍も神に感謝するがよい。おまえ達がこれまでにしてきたことを神にお許しを願うために」

「あなた方がおっしゃったこと、お命じになったことの全てには、私達の肉体は耐えられません」

「無知な者達よ。おまえ達に何の権利も持たぬ者に従いながら、おまえ達に絶対の権利を持ちたもうお方に背くとは、いかなる了見なのか。すべきではないことをする力がありながら、すべきことをする力がないとは、どういうことなのか」

「賢者の皆様、私達の中では欲望が大きく膨らみ、悦楽が多くなりすぎたのです。ですから私達は、自分達の中で大きくなったこれらのものによって、それに見合ったものならば、大きなことをする力があります。しかし、私達は意志が弱くなってしまい、重荷に耐えることができないのです。毎日少しずつ、こうした行ないを控えることで満足してください。このような重荷の全部は背負わせないでください」

「愚かな者達よ。おまえ達は無知の子、迷いの同胞ではないのか。災いが身に軽く、幸いが身に重いとは」

「私達の主人である賢者の皆様、舵取である学者の皆様、あなた方のご非難に対して、至高至大におわす神のお赦しにお縋ります。あなた方のお叱りから神のお許しによって身を守ります。

私達を責めず、私達の弱さを咎めず、私達の無知を叱らないでください。私達が神に従い、これまで空しい欲望に注いできた情熱をそのまま神を崇めることに振り向けたならば、神はよく赦したもう、よく忍たもうお方で、善行は倍にして返したもうお方ですから、私達は必要なものを得るでしょうし、至高至大におわす神は私達の目的を叶えたまい、私達を創造したもうたごとく私達にご慈悲をかけたもうことでしょう」

民衆がこのように言うのを聞いて、学者達は良しとし、民衆の言葉に満足しました。そこで人々は礼拝し、断食し、神を崇め、大いに喜捨を施して、丸1年を過ごしました。

人々がこのように過ごした後、予言者達は言いました。

「この国民がお生まれになった王のためにとった行動から、この王が国民に対して不実でも誠実でもあり、尊大でも謙虚でもある、また邪悪でも善良でもあることがわかる」

星占い師達も王の未来について同様なことを語りました。

「どうしてそのようにおっしゃられるのですか」

と人々が言うと、予言者達は

「これはお祭り騒ぎや音楽など王のためになされた空虚な事柄と、その後になされた反対の事柄のためだ」

と言い、星占い師達は

「金星と木星の位置のためだ」

と言いました。

この王たる子は大きくなるにつれて、言いようのないほどの尊大さ、譬えようのないほどの快活さ、我慢できないほどの攻撃性を示すようになりました。そして悪虐、無道の振る舞いをし、暴政、非道を行なうようになったのです。王にとって最も好ましい人物は自分のやり方に同意を示す者達で、最も厭わしいのは何かにつけて異を唱える者達でした。王は自分の若さ、健康、能力、成功、勝利に目が眩んでおりました。喜びと自画自賛に耽り、好むものは全て目にし、欲するものは全て耳にして過ごしているうちに、とうとう32歳を迎えることになりました。

その時、諸王の娘であった妃達、若者達、後宮の侍女達、非の打ち所のない見事な馬、種々の豪華な乗り物、仕えている男女の召使達を集めました。そして皆に一番新しい衣服を着て、一番美しい装身具を付けるように命じました。次に東向きの高殿を建てるように命じました。その床面は金で覆われ、様々な宝石をちりばめたものでした。建物の高さは120腕尺¹⁰⁾、幅は60腕尺あり、天井と壁も高価な宝石や色々な真珠の玉で飾られていました。更に王は凡ゆる種類の財宝を持って来るようにも命じたので、それらが宝物庫から出され、高殿の前に2列に並べられました。その後で、王は兵士、友人、将軍、書記、侍従、国の要人や学者に参内するよう命令を出し、彼らは礼装に身を包み、精一杯着飾って現れました。騎士は武具に身を固め、騎兵は武器を持って馬に乗りました。そして各々が所定の位置につき、隊列を組んで並びました。王がこのように主張したのは、壮麗な光景を見て、心を喜ばせ、目を楽しませたかったからに他なりません。そこ

で王が出てきて、高殿に上り、自分の王国を見下ろしました。人々はひれ伏し、土下座しました。

王は小姓¹⁾の一人に言いました。

「余は我が国の素晴らしい眺めを目の当たりにした。後は余自身の顔を見るだけじゃ」

そして鏡を持って来させ、自分の顔を見ました。よくよく見やると、何と鬚の中に白髪が1本あったのです。それはあたかも黒い鳥達の中に白い鳥が1羽混じっているかのようでした。白髪を見て王はひどく恐れ戦きました。目に映るものの印象は変わり、顔には悲しみと憂いの色が現れ、喜びは消え失せてしまいました。そして心の中で言いました。

「こいつは余に若さが死んだことを告げ、王権が去りつつあることを示し、王座から降りることを知らせる、そういう時が来たということだ」

次いでこうも言いました。

「こいつは死の先触れ、衰朽の使者だ。余を匿ってくれる侍従もおらず、守ってくれる護衛もおらぬ。余に死を告げ、王権の終わりを知らせておる。何と速いのだろう。こいつによって余の幸せが変わってしまい、喜びが去ってしまい、力が壊れていってしまうのは。皆も防ぎ止めることができず、軍隊も守ってはくれぬ。こいつは若さと力を奪い取り、栄誉と富を消し去り、統一を打ち壊し、遺産を敵味方の間に分けてしまう。生活を損ない、楽しみを台なしにし、建物を壊し、集団を散り散りにし、崇高な物を卑しめ、近寄り難い物を取るに足らぬようにする。余はこいつの重みにのしかかれ、こいつの罠に掛かってしまった」

そして王は担がれて上った高殿から裸足まま歩いて下りました。

それから王は兵士を集め、側近達を読んで言いました。

「皆の者、余はおまえ達に何をしてやったか。余が君主となり、おまえ達のことを引き受けるようになってから、おまえ達に何をもちたであろうか」

彼らは答えました。

「称えられるべき陛下、陛下は我々のために大いにご尽力くださいました。この我らの命を投げうって陛下にお従いたします。どうぞご命令を」

「恐ろしい敵が余の扉を叩いたが、おまえ達は撃退してくれず、敵は余のところまでやって来た。おまえ達は余を支える側近であろうが」

「陛下、敵はどこにいますか。それは見える敵でいますか。見えない敵でいますか」

「その跡は見えるが、それ自体は目に見えぬ」

「陛下、ご覧のとおり、ここに準備ができてございます。我らにお任せください。我々の中には知恵ある者、賢い者がおりますれば、その敵とやらをお示しください。できる限りのことはいたします」

「余はおまえ達のことを大いに誤解していた。おまえ達を選び、余の楯とした時、信頼を置くべき場所を誤ってしまったのだ。余がおまえ達に惜しみなく財産を与え、名誉を高めてやり、他

の者を差し置いて側近にしたのは、おまえ達が余を敵から守り、警護するために他ならぬ。その後も余はおまえ達を助けて、国々を固め、町々に要塞を築き、頼りになる武器を与えた。そしておまえ達から苦悩を取り払ってやり、不安をなくしてやった。これもおまえ達が余を助け、守ってくれるだろうと思ってのことだった。余はおまえ達と共にいながら脅かされるなど思ってもみなかった。余の建てたものがおまえ達がそばにいて取り囲みながら、死の運命に襲われるなど思いもよらなかった。ところが余はおまえ達が周りにいるのに扉を叩かれ、おまえ達が一緒にいるのに襲われたのだ。このことがおまえ達の弱さによるのなら、余は安心して事を運べぬ。また、おまえ達の不注意によるのなら、おまえ達は助言者でも友人でもないということだ」

「陛下、策略¹²⁾や力で退けられうるものなら、我らが命ある限り、神が望みたもうなら、陛下に近付けるようなことはいたしませぬ。しかし目に見えず、それについて知りえないものに対しては、どうすることもできませぬ」

「余は敵から守ってもらえるものと思って、おまえ達を選んだのではあるまいか」

「仰せのとおりでございます」

「おまえ達はどんな敵から余を守ってくれるのだ。余に害をなす敵か、害をなさぬ敵か」

「陛下に害をなす敵からでございます」

「では余に害をなす敵の全てから守ってくれるのか、それともその一部からだけなのか」

「害をなす敵の全てからでございます」

「衰朽の使者が余のもとに来て、余自身の死と王権の終わりを告げた。そして余が築いたものを滅ぼし、建てたものを壊し、集めたものを散り散りにし、正したものを損ない、手に入れたものを無駄に使い、行なったことを変え、強固にしたものを弱める、こうしたことが望みだと言い張った。また、敵どもが余の苦しむのを見て喜ぶようにする、というのも奴らに満足心を与えたいからだとも言い張った。更に、余の軍隊を破り、安逸を奪い、榮譽を取り去り、息子を孤児にし、集まっていた者達をを散り散りにし、余のことで兄弟や家族、親類を悲しませ、余の手足をもぎ取り、余の住いに敵どもを住ませると言ったのだ」

「陛下、我らは人間や野獣や害虫などの地上の動物からならお守りすることができます。しかし衰朽に対しては何の力もなく、どうすることもできず、お守りすることはできないのでございます」

「余をそれから守る策はないのか」

「ございませぬ」

「ならば、それより劣るものなら守ることができるか」

「それは何でございますか」

「心痛や悲しみ、心配のことだ」

「陛下、こうしたものを定めたもうたのは、力強く心優しいお方であらせられます。それは肉体と魂から生じてまいります。陛下が届かない所におられましても、やって参り、阻止できませ

ぬ。たとえ隠されても、隠れないのでございます」

「ならば、それより劣るものならどうだ」

「それは何でございますか」

「予め定められた運命のことだ」

「陛下、運命に打ち勝とうとして、打ち負かされない者がございましょうか。運命と張り合い、打ちのめされない者がございましょうか」

「それでおまえ達は何を言いたいのか」

「我らには運命を追い払うことなどできません。陛下は成功と繁栄を手にしておられますのに、何をお望みでございますか」

「余は友達が欲しいのだ。変わらぬ誠実さを持ち、信を重んじ、いつまでも兄弟として留まり、死に隔てられることも、衰朽に仲を妨げられることもない友達、野心のために余に忠告をするのを止めたりせず、余が死んでも一人にせず、余が生きている限りは離れぬ友達、おまえ達にはできなかったが、死にまつわる事柄から余を守ってくれる友達がな」

「陛下、ご説明下さったかような者達とは誰なのでございますか」

「余がおまえ達に良くしてやったために損なってしまった者達だ」

「陛下、我らにもその者達にも陛下はご温情を施されておられるではございませぬか。陛下のご人格は非の打ち所がなく、お情けも深くていらっしゃいますから」

「おまえ達の余に対する親交には人を殺す毒が含まれており、その服従とは見ぬ、聞かぬこと、その同意とは口をきかぬことだ」

「どうしてそのようなことがございましょう、陛下」

「おまえ達が余と親しくしているのは富みを増やすためであり、余に同意を示すのは財を集めるため、服従するのは余の不注意を誘うためだ。おまえ達は余の来世への取り組みを遅らせ、余に対して現世を飾り立てた。真の忠告をしてきていたなら、余に死のことを思い起こさせただろうし、また、真の思いやりを持っていたならば、余に衰朽のことを思い起こさせただろう。そしていつまでも残るものを集めてくれ、消え去ってしまうものを増やすようなことはしなかっただろう。おまえ達が有益だと主張したものは有害なものであり、友情だと主張したものは敵意であった。このようなものはおまえ達に返したぞ。余はもう必要とせぬ」

「賢明なる称えられるべき陛下、仰せの節はよくわかりました。お答えしたき譏がございませぬ。と申しましても、陛下と議論をいたすつもりは毛頭ございませぬ。論点がどこにあるのが飲み込めたのでございませぬ。この点について黙っていることは国を滅ぼし、世を終わらしめ、そして敵を喜ばすことになりませぬ。陛下のお考えが変わり、このようにご決意されましたことは、我らにとっては一大事なのでございませぬ」

「安心して申すが良い。思うところを恐れずに申してみよ。余は今日まで激情と自尊心に支配されていたが、今や、それらを制御できるのだ。今日まで打ち負かされていたが、今や、打ち勝つ

たのだ。今日までおまえ達の王でありながら、その実、一介の奴隷であった。だが今や、開放され、おまえ達も余の王権から自由になったのだ」

「陛下、我々の王でおられましたのに、何の奴隷となっておられたのでございますか」

「余は自己の欲情の奴隷となり、無知に制圧され、欲望に隷属していたのだ。だがこうした従属をようやく断ち切り、背後に投げ捨てることができたのだ」

「ご決意なされたところをお話くださいませ、陛下」

「節度のあること、来世のために身を捧げること、これまでの偽りを捨て去ること、これまで背負っていた重荷を投げ捨てること、死の準備をすること、衰朽に備えることだ。というのも、死の使いが余のもとで、余に死が訪れるまでそばを離れず、一緒にいるように命じられたと申しただけだ」

「陛下、おそばまで参りながら我々には見えぬ、この使いとは何者でございませうか。我々の知らぬ死の先触れとは」

「その使いとは黒い鬚の中に見えるこの白い毛だ。こいつが黒い鬚の全部に向かって終わりだと喚き、全部がこいつに應えて服従したのだ。死の先触れとはこの白い毛が兆しとなる衰朽のことだ」

「陛下、何ゆえ、国をお見捨てになり、臣民を蔑ろになさるのでございませうか。国民をなおざりになさる罪をお恐れにならないなど、どうしておできになるのでございませう。神からの最高の報奨は人々への善行に対して与えられ、善行の最たるものは国民や社会への奉仕であることをご存じないのでいらっしゃるでしょうか。罪をお恐れにならないなど、どうしておできになるのでございませう。皆が減びることには、ご自身だけが高潔であられることによってお受け取りになろうと望んでおられるご報奨以上の大罪が含まれておりますのに。ご存じないのでいらっしゃるでしょうか。神に対する崇拜の最も優れたものは行ないであり、行ないの最も正しい道にあるものは政であることを。また、陛下は臣民に対して公平であらせられ、善政を施されておいででございませうので、そのご善行の分だけご報奨をお受け取りになられるだろうことを。それゆえ陛下、御手に委ねられております国民への福利を捨て置かれますれば、国民が減びることを欲しておられることになるのではございませぬか。国民が減びることを望んでおられるのなら、それは陛下ご自身のことだけを顧みられてお受け取りになられるご報奨より大きな罪を、国民に対して背負われることになるのではございませぬか。陛下、学者達が次のように申しておるのをご存じないのでいらっしゃるでしょうか。『他人に悪をなす者は自らも悪を被るに値する。他人に善をなす者は自らも善を受けるに値する』と。陛下が指導者であらせられるこの臣民をお見捨てになること以上の悪しき行ないがございませうか。陛下が統括者であらせられるこの国民のもとにお留まりになること〔以上の善き行ないがございませうか〕¹³⁾。陛下、現世においても来世においても栄誉に至る手段である王衣をお脱ぎになることは、決してなさらないでくださいませ」

「おまえ達の申したことはよくわかったし、説明も飲み込めた。だが、もし余がおまえ達の間

に正義を拡めるため、またおまえ達に善行を施すことで神からの報奨を得るために王権を求めるとしても、余を支えてくれる補佐も、助けてくれる大臣もいなければ、おまえ達の中でただ一人頑張っどこまで行けるであろうか。おまえ達は皆、現世と現世での欲望や悦楽に心を奪われておるのではないか。余も、離れたい、捨てたいと望んでいる現世の方を向かないとも限らない。もしそんなことになれば、不意に死が襲ってきて、余を王座から地の底へ引き降ろし、身に着けていた綿や金・宝石を織り込んだ衣服の代わりに土で余を覆い、それまでの広々とした所に代わって狭苦しい所に余を閉じ込め、名誉を奪って屈辱を着せてしまう。余は自分一人になり、おまえ達は誰一人として余と共にはいなくなる。おまえ達は余を人の住む土地から引き出し、誰もいない荒野に引き渡す。余の肉を猛猛な鳥や地の虫どものなすがままにさせ、蟻や蟻より大きい虫どもに食らわせ、余の身体は蛆の塊になり、汚らしい骸になる。恥辱が余の仲間となり、栄誉は見知らぬ者となる。おまえ達のうち余に最も強い親愛の情を示していた者が真っ先かけて余を葬り、余のこれまでの行ない、犯した罪を余の清算に任せようとする。こうしたことは余に深い悲しみを与え、その結果、後悔の念を起こさせるのだ。おまえ達は余に害をなす敵から守ってくれると約束していた。だが見よ、おまえ達には守ることができず、その力も方法もない。皆の者、余は自ら策を講じることにした。おまえ達が虚偽をもたらし、余を詐欺の罠に掛けたからだ」

「称えられるべき陛下、陛下が今までとは違っていらっしゃるのと同様、我々も今までとは違います。陛下がお褒りになられたのと同じ原因で我々も変わり、陛下がご別人になられたのと同じ原因で我々も別人になったのでございます。ですから我々が悔い改め、陛下に進言するのを退けないでくださいませ」

「おまえ達がそのように振る舞う限りは、おまえ達のもとに留まろう。だがそれを違えたなら、余はおまえ達のもとを去るであろう」

そこでこの王は王位に留まり、兵士達も王の生き方に倣い、神への崇拜にも努めました。そのため王が亡くなるまで国は栄え、敵は撃ち破られ、領土も増えたのです。この王がこうした生き方をしたのは32年間で、王の生涯は64年でした。

III. 第 2 話

ブーザーサフ¹⁴⁾は言った。

「このお話を伺うことができ、とても喜んでおります。このようなお話をもっとお聞かせください。喜びが更に増し、主への感謝の気持ちも深くなると思います」

そこで賢者¹⁵⁾は次のように語った。

「語り伝えられるところによりますと、善行に勤しむ王がおり、至高至大におわす神を畏れ崇める兵士達を擁しておりました。父王の治世は苦難の時代で、内部分裂が起り、国土の一部が敵に奪われたのでした。当時王子であったこの王は兵士達に、至高至大におわす神を畏れ敬って、

神に助けを求め、神罰を恐れて、神にお縋りすることを勧めました。そしてこの王が君主になると、敵は撃ち破られ、臣民は一つとなり、国は栄え、王権は安定しました。ところが王は至高至大におわす神が与えたもうたみ恵みを見ると、驕り高ぶり、向こう見ずな振る舞いをし、暴君になって、ついには至高至大におわす神の崇拝を止め、神のみ恵みを感謝しなくなり、神を崇める人々をすぐに殺してしまうようになりました。王の治世は続き、長きに及びました。とうとう人々は、王が君主になる前に自分達も持っていた正義を顧みず忘れ去ってしまい、王の命ずるままに従い、たちまち迷いの道に入ってしまった。王はこうした所業を止めることがなく、子供達はその中で育ち、至高至大におわす神は人々の間で崇められることも、その御名が唱えられることもなくなってしまいました。人々は自分達には王の他に神がいっしょとは思わなくなってしまったのです。王は父王が生きており、まだ王子であった時、至高至大におわす神に次のことを誓約しておりました。いつの日か自分が君主になったら、至高至大におわす神に従って、これまでのどの王も実行せず、できなかったことを行ないますと。しかし君主になるや、王権の虜になって初めの考えや以前の志しをすっかり忘れてしまい、酒飲みのように酔い、酔いから覚めて正気に戻ることはありませんでした。

さて王の寵臣の一人に善行に勤しむ男がおり、王のもとで最も高い地位を占めておりました。男は王が信心の道から迷い、神に誓約したことを忘れているのを見て、心を痛めておりました。王に意見したいと思うのですが、その度に王の尊大さや横暴さが頭をよぎるのでした。このような人物はその国にはこの男と、他にもう一人しか残っておりませんでした。その一人というのは王の領地の片隅に住んでおりましたが、その場所を知る者も、その人物の名を呼ぶ者もいなかったのです。ある日この男は髑髏を自分の衣服に包み隠して、王のもとを訪れました。王の右に座ると、衣服の中から髑髏を取り出して、前に置き、片足で踏み付けました。そして王の面前で髑髏を王の絨毯の上に擦り続けたので、とうとう広間は擦り落とされた屑で汚れてしまいました。王は男のしたことを見て激怒しました。そこに同席していた者達の視線は王に注がれ、護衛の者達は刀を抜く用意をし、男を殺せという王の命令を待ち受けました。しかし王はこの時は怒りを抑えました。当時の王達は横暴で不信心であったにもかかわらず、臣民の福利を考え、また国土の繁栄を熱望して、忍耐と慎重さを持ち合わせておりました。そのことにより、力も増し、税も一層集まるのでした。王は男が立ち上がり、髑髏を衣服に包むまで、ずっと黙ったままでした。男は次の日も、また次の日も同じことをしました。

男は王が髑髏について尋ねず、それに関することは何も言わないのを見てとると、秤と少量の土を髑髏と一緒に持ってきました。そして髑髏をいつものようにした後、秤を取って一方の皿に1ディルハム¹⁶⁾の重りを、もう一方の皿にその重さまで土を乗せました。それからその土を髑髏の目の中に入れました。次に土を手につかみ取り、髑髏の口のところに入れました。王は男のすることを見るや、堪忍袋の緒が切れ、辛抱しきれなくなって、男に言いました。

『おまえが余に対する立場を利用し、勝手な振る舞いができ、地位が抜きん出ているのを良い

ことにして、こうしたことを敢えてやったことはわかっている。恐らく何か意図があるのだろう』
そこで男は跪いて王にひれ伏し、その両足に口づけして言いました。

『陛下、ご理性の全てをお働かせになって、私の申し上げることをお聞きください。言葉というものは矢に譬えられます。柔らかい土には地に向かって放たれば、しっかりと突き刺さりますが、岩ならば突き刺さりません。また言葉というものは雨にも譬えられます。種の蒔かれた肥えた土地に降り注げば芽が出ますが、塩気のある沼地に降り注げば芽は出ません。人の欲望は多様であって、理性と欲望は心の中で戦います。欲望が理性を征服すれば、その人は分別のない、愚かな行動をとり、欲望が征服されたなら、その人は過ちのない行動をとるのです。私は子供の頃から学問を愛し、求め、他のどんな事柄よりも優先させてまいりました。そしてどんな学問もなおざりにせず、それぞれ頂上を極めました。ある日のこと、墓地を歩いておりますと、この髑髏が王家の墓地から飛び出しているのが目に留まりました。私は髑髏がそんな場所にあり、胴体から離れてしまっているので、諸王のことを思い、憤慨いたしました。そこで私はその髑髏を手にとって家まで持ち帰り、錦を着せ、バラ水をふりかけ、敷物の上に置いて、《もしこの髑髏が王のものならば、私の敬意が功を奏して、もとの美しさと輝きを取り戻すことだろう。だがもし貧者の髑髏であったなら、敬意を払ったとて何も変りがないだろう》と言いました。そして何日もそうしてみたのですが、その外見に何の変化も認められませんでした。それを見て、私は召使のうちで最も卑しい者を呼びました。召使は髑髏を侮辱しましたが、髑髏は侮辱しようが敬意を払おうが同じ状態なのでございます。そこで私は賢者達のもとを訪れ、この髑髏のことを尋ねてみましたが、その身元がわかる者は誰一人おりませんでした。その後で、陛下が知の頂、寛容の宿であることを思い出し、恐る恐るやって参りましたが、私は陛下の方からお口を開かれるまで、何もお尋ねできませんでした。陛下、お教え願いたいのですが、これは王の髑髏なのでしょうか、それとも貧者の髑髏なのでしょうか。と申しますのも、次のようなことを知ったからに他なりません。どうにもわからなくなった時、何ものにも満たされたことのないその目のことに考えが及びました。この目はもし天の下にあるものを支配下に置いたならば、天の上にあるものも得ようと努めることでしょう。そこでこの目を塞ぐものを考え始めました。何と1ディルハムの重さの土が目を塞ぎ、満たしたではありませんか。次に何ものにも満たされたことがないその口を見やりますと、一つかみの土が口を満たしておりました。陛下、この髑髏は貧者のものだとおっしゃるのでしたら、私はこれを王達の墓地の真ん中で見つけたと抗弁いたします。そして王達の髑髏と貧者どもの髑髏を集めます。王家の髑髏の方がどこか優れておりましたなら、陛下のおっしゃったとおりとなります。また、陛下がこの髑髏は王のものだとおっしゃるのなら、これの持ち主であった王は今日の陛下と同様、かつては王としての輝きと美に包まれていたのだと申しあげます。この髑髏のように決してなられませんように。そうなれば足で踏まれ、土にまみれ、虫に食われ、沢山あったものは少しになり、栄誉は恥辱となり、長さ4腕尺にも満たない穴に塞ぎ込められ、王権は他の者に引き継がれ、陛下の噂も消えてしまい、ご業績は損なわれ、陛下が厚遇なされた

者が軽蔑され、軽蔑しておられた者が厚遇されるのです。陛下の敵どもが喜び、お味方が卑しめられ、陛下は土に妨げられて、我々がお呼びしてもお聞き取りになれず、敬意を表してもお受け取りになれず、侮辱してもお怒りになれないのです。ご息方は孤児になられ、またお妃方は未亡人になられますが、すぐに別の夫を持たれることでしょう』

王はそれを聞くと、恐ろしくなり、目には涙が溢れて大声で泣き叫び、嘆き悲しみました。男はこの様子を見ると、自分の言葉が王の心を捕らえ、功を奏したのを知り、一層勇気を増して今一度同じことを繰り返して言いました。すると王は男に次のように言いました。

『神が余に代わっておまえに良き報いをお与えくださるよう。また余の周りの高官達に悪しき報いをお与えくださるよう。命に賭けて言うが、余はおまえがこの話で申したかったことがよくわかった。自分のことも悟った』

人々はこの話を聞き、得のある人々が王のもとにやって来るようになりました。神は王の生涯を幸福で終らしめたまいました。王はこの世を去るまでずっと幸福に過ごしたということです』

Ⅳ. 第 3 話

王子は言った。

「このような譬え話をもっとお聞かせください」

そこで賢者は語った。

「語り伝えられるところによりますと、昔一人の王があり、たいそう子供を欲しがっておりました。子供が授かるために人々が行なっていることは残らず試しておりました。長らくこうした状態が続いた後に、妃の一人に子ができて、王子が生まれました。この王子はすくすくと育ち、大きくなったある日のこと、足を一步踏み出して、

『心せよ¹⁷⁾。あなた方は軽やかに動くだろう』

と言いました。また一步踏み出して、

『あなた方はやがて老いるだろう』

と言いました。更に三步目を踏み出して、

『あなた方はやがて死ぬだろう』

と言いました。その後再びいつものように子供らしい振る舞いをするようになりました。そこで王は学者や星占い師を召し出して言いました。

『この息子のことについて教えてくれ』

彼らは王子のことを色々と調べてみましたが、ことは彼らの手には負えず、何もわかりませんでした。彼らには何もわからぬことを見てとると、王は王子を養育係達の手へ渡し、そのもとで育て始めました。しかしながら一人の星占い師が次のように言いました。

『王子様は導師¹⁸⁾になられることでしょう』

そこで王は王子に護衛の者達を付けて、そばを離れることのないようにさせました。やがて王子は青年になり、ある日のこと、養育係や護衛の目を盗んで抜け出しました。そして市場にやって来ると、葬列に出くわしたのです。王子が

『これは何ですか』

と尋ねると、

『死人です』

と人々が答えました。

『どうして死んだのですか』

『年を取り、寿命が尽き、定めの時が近付いて死んだのです』

『以前は元気に生きていて、歩いたり、食べたり、飲んだりしていたのですか』

『その通りです』

それからまた行くと、大層年を取った老人に出くわしたのです。王子は驚き目で見詰め始め

『これは何ですか』

と尋ねると、

『大変年を取った老人です。もう若々しさがなくなって老いたのです』

と人々が答えました。

『以前は元気だったのに、その後白髪になったのですか』

『その通りです』

それからまた行くと、仰向けに横たわった病人に出くわしたのです。王子は驚き目で見詰め始め、

『これは何ですか』

と尋ねると、

『病人です』

と人々が答えました。

『この人は以前は元気だったのに、その後病気になったのですか』

『その通りです』

王子は言いました。

『神かけて、もしあなた方の言うことが本当ならば、人々は狂っている』

さて、王子がいなくなったので皆が探しましたところ、何と市場にいたのです。そこで王子を迎えに来て、連れ帰り、館の中に入れました。王子は館に入ると、仰向けに寝て、館の屋根の木材を見て尋ねました。

『これは以前はどのようなようだったのですか』

『これは以前は地面に生えていた木でした。それから木材になり、切られました。そしてこの館が建てられると、その上に据えられたのでございます』

王子がこのように話している時、王は王子のことを任せてあった者達に使いを出し、

『王子が話をしたり何か言っているか見てくれ』

〔と仰せになりました〕。すると彼らは

『そのとおりでございます。我々にとってはうわごととしか思えぬことを口走っておいでです』

王はそのことを知り、王子が発したすべての言葉を聞くと、学者達を呼んで尋ねましたが、彼らには何もわからなかったのです。前に王子について語ったあの星占い師は別でしたが、王はその言葉を聞きたくはありませんでした。ある者が進言しました。

『陛下、王子様にお妃をお迎えになりますれば、このようなこともなくなり、知性をお持ちになり、道理を弁えられ、物事がよく見えるようになられることとございましょう』

そこで王は国中に使いを送り、最も美しく麗しい女性を王子のために探し求め、妻合わせました。婚礼の宴が始まり、芸人達は演技を、笛吹き達は演奏を始めました。王子は人々のざわめき¹⁹⁾や声を聞くと、

『これは何ですか』

と尋ねました。

『この者達は王子様のご婚礼のために集められた芸人や笛吹きでございます』

すると王子は黙ってしまいました。婚礼が終り、夜になった時、王は息子の嫁になる娘を呼んで言いました。

『余にはこの王子の他には息子がおらぬ。王子のもとに行ったら、優しく振る舞い、近くに行き、かわいがられるようにするのじゃ』

娘は王子のもとに行くと、彼に近付いていき、親しくなろうとしました。王子は言いました。

『慌てずともよい。夜は長いのだ。神が汝を祝福してくださる。食べ、飲み終えるまで待つのだ』

そして食べ物を持ってこさせ、食べ始めました。王子が食べ終えると、娘は飲み始めましたが、酔いが回り、眠ってしまいました。

王子は立ち上がって館を出ました。護衛の者や門番の目を盗んで抜け出ると、町の中を歩き回りました。そこで自分と同じ年頃の町の若者に出会い、この若者に付いていきました。王子は身に着けていた衣服を脱ぎ捨て、若者の着ていた衣服を何枚か纏い、なるたけ身をやつしました。そして二人は一緒に町を出て夜通し歩きました。やがて朝が近付くと、追っ手を恐れて隠れました。さて朝になって人々が娘のもとにやって来ると、娘が一人で眠っていたので、尋ねました。

『新郎はどこにいらっしゃるのですか』

『今の今までここにおいででしたわ』

そこで彼らは王子の行方を探しましたが、見付けることはできませんでした。夜になると、王子と連れの若者は道を進みました。それから二人は夜に進み、昼間は身を隠し続け、ついに父王の領地を出て、別の王の領地に入ったのです。

二人が入った国の王には一人の娘がいましたが、王は娘の好きになり、気に入った若者として結婚させまいと決めていたのです。そして娘のために天まで届くような高い部屋を作り、そこから道を見下ろすことができるようにしました。王女はそこに座り、行き来する全ての人を見ていました。さて王女がこのようにして見ていますと、ふと、粗末な身なりをした王子と連れもの若者が市場を歩き回っているのが目に留まりました。そこで王女は王に

『私はあるお方が好きになりました。私を誰かに妻合わせたいとお考えならば、そのお方にしてくださいませ』

との言づてを送りました。王女の母親のもとにその使いがやって来て言いました。

『王女様はさるお方を好きになられ、これこれとおっしゃっておられます』

母親は喜んで娘のところに行き、その若者を見ようとしました。すると人々が王子を教えてくれました。そこで母親は急いで降りると、王のもとへ行き、

『王女が若者を好きになりました』

と言いました。王は若者を見に行きました。

『余にその若者を見せよ』

人々は遠くから王子を見せました。そこで王は命じて彼にりっぱな衣服を着せ、降りて行って尋ねました。

『おまえは何者か、どこから来たのじゃ』

王子は答えました。

『なぜ私のことなどお尋ねなのでございますか。私は一介の貧しい男にすぎません』

『おまえは異国の者であろう。この町の者とは肌の色が似ておらぬ』

『私は異国の者ではございません』

王は王子が本当のことを言うように手を尽くしましたが、王子は頑として話しませんでした。そこで王は人々に命じて、わからないように王子を見張らせ、どこに行くかを調べさせました。王は家族のところに戻ってくると、

『まるで王子のような者を見た。おまえ達の誘いに目もくれぬ』

と言いました。王は王子に使いを遣って、

『王様がお呼びでございます』

と告げさせました。すると王子は

『王様がお呼びだからといってどうだというのです。私には用がありません。王様も私のことをご存じでないのに』

と言いました。しかし意志に反して連れていかれ、王のもとにやって来ました。王は椅子を持ってくるよう命じ、王子は自分のために椅子が置かれると、その上に座りました。王は妃と娘とを呼んで後方の御簾の裏側に座らせました。王は王子に言いました。

『おまえを呼んだのは、良い知らせがあるからじゃ。余には娘が一人おるのだが、おまえを好

きになった。そこでおまえと結婚させたいと思うのじゃ。おまえが貧しいのなら、金持ちにしてやろう。地位を上げ、高貴な者としてやろうぞ』

王子は言いました。

『せっかくのお申し出でございますが、私には用なきことなのでございます。王様、よろしければ譬え話を一つさせてください』

『それでは申してみよ』

そこで王子は語りました。

『語り伝えられるところによりますと、ある王に一人の息子がいました。この王子には友達がおおり、食事を用意して王子を招きました。王子は彼らと共に出かけ、食べたり飲んだりしたあげく、酔って眠り込んでしまいました。王子は夜中に目を覚まし、家族のことを思い出しました。家に帰ろうとその場を出ましたが、その時、仲間の誰も起こさなかったのです。歩いているうちに、酔いが回ってきました。途中で墓地を見ると、自分の住まいに帰り着いたのだと思ったのです。それで墓地に入ったのですが、そこには死人達の臭いが漂っていました。ところが、王子は酔っていたので、良い香りだと思いました。骨が落ちていましたが、それを敷かれた自分の寝床だと思いました。最近亡くなった者の死体があり、臭いを放っていましたが、それを自分の妻だと思い、そばに行き、抱き締めて口づけしました。そして一晩中その死体と戯れていました。さて目が覚めてよく見ると、自分は死体の上にあります。それは悪臭を発生し、衣服も皮膚も汚していました。王子は墓地と死人達を見ると、そこを出て、人目を憚るほどひどい状態で町の門へ向かいました。門が開いていたので、中に入り、ようやく家族のもとに辿り着きました。誰にも会わずに済み、幸運だったと思いました。そこでかの衣服を脱ぎ捨てて身体を洗い、別の衣服を着て香水をふりかけました。王様、神がご長寿をお与えくださいますように。さて、この王子はやればできるからといって、前の状態に戻ると、お思いになられますか』

『いや』

と王が答えると、王子は言いました。

『私はこの者と同じなのです』

王は妃と娘の方を振り返って言いました。

『余が申したように、この男にはおまえ達の申し出を受けるつもりはなさそうじゃ』

すると母親が言いました。

『陛下は王女の容姿のご説明が足りませんでしたわ。私が参りましたのは、この若者の前に出て話をいたすためでございます』

そこで王は王子に言いました。

『妃がおまえの前に出てきて話したいそうじゃ。これまで誰の前にも出てきたことはないのじゃが』

王子は言いました。

『お望みならば、出ていらしてください』

妃が出てきて座り、王子に言いました。

『神があなたにお与えになられた恵みの糧と良きことを受け入れてください。娘と結婚させようというのですよ。娘を見て、至高至大におわす神がお与えくださった美しい顔と整った姿を見れば、きっとあなたも喜ぶことでしょう』

王子は王の方を見て言いました。

『王様に譬え話を一つさせていただけませんか』

『構わぬ』

王子は語りました。

『盗人達が王の宝物庫に入って盗もうと互いに約束を交わしました。そこで宝物庫の壁に穴を開け、中に入ると、これまで見たこともないような品々が目に留まりました。何と、黄金で出来、黄金で封印された箱があったのです。盗人達は言いました、《この箱に勝るものはない。黄金で出来ているうえに黄金で封印されている。中のものはもっと素晴らしいだろう》。そこでこれを運び出し、互いに相手を疑いながら、藪の中まで持っていきました。そこで箱を開けてみると、中には何とまむし²⁰が入っていて、盗人達の顔に飛びかかるや、皆殺しにしてしまいました。王様、神がご長寿をお与えくださいますように。さて、この盗人達に起こったこと、盗人達がこの箱のために出くわしたことを知っている者は、箱を再び開けてみるとお思いになられますか』

『いや』

と王が答えると、王子は言いました。

『私はこの者と同じなのです』

次に王女が父王に言いました。

『お許しをいただきますれば、私が自分で出てまいり、お話させていただきとうございます。私と、私の美しさ、麗しさ、端正さをご覧になり、至高至大におわす神が私にお与えくださった美しさをお知りになれば、私を愛さずにはおられないことでございましょう』

そこで王は王子に言いました。

『娘がおまえの前に出てきたいそうじゃ。今まで誰の前にも出てきたことはないのじゃが』

王子は言いました。

『お望みならば、出ていらしてください』

王女が出てきましたが、その顔は誰よりも美しいものでした。王女は王子に言いました。

『これまで私のような、或は私よりも完全に美しく完成された麗しい女性をご覧になったことがおありですか。私はあなたに心引かれ、お慕いもうしております』

王子は王の方を見て言いました。

『王女様に譬え話を一つさせていただけませんか』

『構わぬ』

王子は語りました

『王様、語り伝えられるところによりますと、ある王に息子が二人ありました。そのうちの一人を別の王が捕虜にして、館に閉じ込め、そのそばを通りかかる者は誰でもこの王子に石を投げ付けるように命じていました。しばらくその状態が続きましたが、やがてある時、兄弟の王子が父王に言ったのです、《お許しくださいませ、兄弟のもとに行き、策を講じて助け出したいと思えます》。王は言いました、《行きなさい。金も品物も乗り物も好きなだけ持っていきなさい》。そこで王子は食糧と乗り物を用意し、歌姫と泣き女を連れて出発しました。かの王の町に近付いた時、王子がやって来るとの知らせを受けて、王は王子を（町の中に入れないうために）²¹⁾迎え出るように人々に命じました。それで人々は王子を迎え出しました。また、王は命じて（王子を町の中に入れないうために）町の外に王子用の家を建てさせ、王子はその家に宿を取りました。王子はそこに腰を下ろすと、品物を広げ、召使い達に命じて人々の思いのまま、人々の言い値で売らせました。人々が買い物に夢中になっているのを見ると、王子はこっそり抜け出して町に入りました。兄弟が閉じ込められている場所はどこかを知っていたのです。その牢に着くと、小石を取って投げました。兄弟がまだ生きていのかどうかを見るためです。中の兄弟は石が当たった時、叫び声を上げ《私を殺すのか》と言いました。番人達はこれを聞いて驚き、出てくると尋ねました、《どうして叫び声を上げたのか、どうしたんだ。何が起こったんだ。俺達がずっといじめたり、殴ったりしても、通りがかりの者が皆石を投げても、おまえは一言も発したことがなかったのに。この男が小石を投げると叫ぶとは》。《人々は私のことを知らないで投げているのだ。ところがこの男は私のことを知っていながら投げたからだ》。兄弟たる王子は自分の家と品物のところで帰り、人々に言いました、《明日また来てください。絹の服や今までに見たこともないような品物を広げますから》。そこで人々はその日は帰って行きました。翌朝になると、人々は皆戻ってきました。王子は命じて絹の服を並べさせ、歌姫や泣き女を召し出し、その他人々が楽しめるあらゆるものを繰り出しました。こうしたことが始められると、人々は夢中になりました。そこで王子は兄弟のところに行って枷を切り離し、《私が治してあげますよ》と言いました。そして密かに兄弟を連れて町の外に出ると、持参した薬を傷に塗ってやりました。一息ついたところで兄弟に道を示し、その後で言いました、《出発しなさい。海に用意して置いた船が見付かるでしょう》。そこで彼は歩いていきましたが、穴に落ちてしまいました。穴の中には竜²²⁾がいて、穴の上には木が生えていましたが、見るとそのてっぺんに十二匹の鬼²³⁾がいます。木の根本には十二本の刀があり、それらが鞘から抜かれ、ぶら下げられています。この王子は何とか持ちこたえ、あれこれ策を講じた末、ようやく木の枝を一本つかみ、それにぶら下がって、抜け出しました。そして進み、ついに海に達すると、岸边に用意された船を見付けたのです。そこでこれに乗り、家族のもとまで乗せていってもらいました。王様、神がご長命をお与えくださいますように。さて、この王子は自らの目で見、出くわしたことに再び戻るとお思いになりますか』

『いや』

と王が答えると、王子は言いました。

『私はこの王子と同じなのです』

そこで王達は王子のことを諦めました。すると王子に町から従ってきた若者が歩み寄り、そつと王子に言いました。

『私のことを王女に話し、私を王女と結婚させてください』

王子は王に言いました。

『この若者は王様が彼を王女と結婚させたいとお望みならば、お受けすると申しております』

王は言いました。

『では、そうしよう』

その後で、王子は言いました。

『王様に譬え話を一つさせていただけませんかでしょうか』

『構わぬ』

王子は語りました。

『ある男が一団の者と共に、船に乗り込み、海上を幾夜か進みました。その後、鬼ども²⁴⁾の住む島の近くで船が壊れ、この男を除いて全員が溺れてしまいました。波が男を島に打ち上げましたが、鬼どもが島から海を見下ろしていたのです。男が鬼(女)のところにやって来ると、この鬼は男のことが好きになり、結ばれました。ところが朝になると、男を殺してその身体を仲間達と分け合いました。そして同じこと(即ち、難船のためにこの島に打ち上げられること)が別の男にも起こりました。鬼どもの王女がこの男を捕らえ、連れていきました。そして男はこの鬼と一緒に夜を過ごし、結ばれました。しかし男はこれまでの男達に起こったことを知っていたので、警戒して眠りませんでした。やがて朝になると、鬼は起きましたが、男は抜け出して海岸までやって来ました。すると船が見えたので、船の衆に呼びかけて助けを求めました。彼らは男を乗せて、ついに家族のもとまで連れていってくれました。鬼どもは朝になると、男と過ごした鬼のところにやって来て尋ねました、《一緒に夜を過ごした男はどこにいるのかい》。《私のところから逃げたのさ》。鬼どもは信用せず《あんたが食ったんだね。私らを差し置いて独り占めしたね。あいつを連れてこないんなら、あんたをやっちまうよ》と言いました。そこでこの鬼は海を渡り、ついに男の住んでいる家までやって来ました。そして中に入り、男のそばに座って尋ねました、《この旅ではどんなことがあったのですか》。《災難に遭いましたが、神がお救いくださいされたのです》と男は言って、そのことを話しました。《でも、助かったのですね》と鬼が言うと、《そうです》と男は答えました。すると鬼が言いました、《私とその鬼なのさ。おまえを捕まえに来たんだ》。《神かけてお願いいたします。どうか私を殺さないでください。私の代わりに別の男を教えますから》。《情けをかけてやろう》。そこで二人は出かけ、王のところに行きました。《お聞きください。神が王様にご隆運をお授けくださいますように。私はこの人と結婚いたしました。他の誰よりも愛していたのでございます。けれどもこの人は私を嫌い、一緒にいるのも嫌

がるのでございます。私達のことをお調べください」と鬼は言いました。王は鬼を見ると、その美しさに魅了され、男と二人だけになって密かに言いました、「あの女と別れてくれぬか。余が結婚したい」。《承知いたしました。神が王様にご隆運をお授けくださいますように。あの女は王様以外の者にはふさわしくございません》。そこで王は鬼と結婚し、一緒に夜を過ごしました。夜が明けると鬼は王を殺し、手足をばらばらにして仲間のところに運んでいきました。さて王様、このことを知っている者はそんな目に遭いに行くと、お思いになられますか』

『いや』

結婚を申し込んだ若者は王子に言いました。

『私はあなたのおそばを離れません。私が望んでいたことはもはや必要ではありません』

そして二人は王のもとを辞し、いと偉大におわす神に仕えて、国々を巡りました。至高至大におわす神は二人をして多くの人々を導きたまい、王子の名声は高まり、その評判は遠くの国々まで届きました。王子は父のことを思い出して言いました。

『父のもとに使いを送れば、父を今の情況から救い出せるだろう』

王子は父王に使いを送りました。使いの者は王のもとに着くと言いました。

『ご息が陛下にご挨拶をなさっておられます』

そして王に王子のことを語りました。そこで父王とその家族は王子のもとへやって来ました。そして王子は彼らを今の情況から救い出したのでした』

V. 解 説

本翻訳の箇所は、賢者ピラウハルが王子ブーザーサフに、出家を促すと共に、父王の回心を期待させるという目的の下に語った、回心と出家に関する三つの長い教訓話の部分である²⁵⁾。そして第3話は、四つの譬え話を含む粹物語となっている。

第1話の、自分の頭に1本の白髪を見て、世を捨てる王の物語は、devadutta “死の使者たち”に関する物語の一つのヴァリエーションであると言われるが²⁶⁾、『ジャータカ』(Jātaka, 本生譚、ブッダの前生世物語) 9 Makhādeva-jātakaを始め『ジャータカ』525 Culla-Sutasoma-jātakaや、『ジャータカ』541 Nimi-jātaka、『マッジマ・ニカーヤ』Majjhima-nikāyaいわゆる阿含経“中部”) 83のMakhādeva-suttaに類似の例が見られる。

そしてIbn an-Nadīm (389/990年没)の著al-Fihrist 8章3節の“有名、無名の著者達による、訓戒、格言、賢言を含むペルシア人、ギリシア人、インド人、アラブ人の書物名”の項中に、“白髪の王と、彼が大臣達や王国の者達との間で行なった対話の書”が挙がっている²⁷⁾。

なお、このモチーフは、Ibn Zafar as-Siqillī (565/1169-70年没)の著Sulwān al-Mutā‘ fī ‘Udwān al-Atbā‘²⁸⁾や、Ibn al-‘Arabī(638/1240年没)の著Muhādarat al-Abrār wa-Musāmarat al-Akhyār²⁹⁾に、ギリシア人の王の話として登場しており、D.Gimaretは仏

教起源の教訓話が、“ピラウハルとブーザーサフの書”の無名の著者によって再採用されるより前に、既にイラン以西の禁欲文学の一部をなしていたのではないかと言う³⁰⁾。その他、この地域では、Wahb b. Munabbih (110/728-29年没)に帰せられる、ユダヤ起源の、malak al mawt (死の天使)の話もよく知られている³¹⁾。

また、この話のテーマは仏教起源としても、Gimaretが指摘するように、ここに登場する神とサタン、現世と来世、消え去るものといつまでも残るもの、という対立は、イラン以西のものとも考えられる³²⁾。

第2話は、それに対応する類似の仏教の或はインドの話がよく分からない。何物も満足させることができないのに、少しの土だけで満たしうる目というテーマは、SternとWalzerに従えば、ラビヤムスリムの文学、即ち、Babylonian TalmudのTâmîd, 32bやIbn Hishâm (218/833年没)の著at-Tijân fi Mulûk Himyar³³⁾に、アレクサンダー或は Dhû l-Qarnayn (双角の主、一般にアレクサンダー)に関する伝承として見いだされる³⁴⁾。

そして、髑髏になれば、王も貧者も見分けがつかないという、この第2話の中心テーマは、同じくSternとWalzerによれば、例えばHunayn b. Ishâq (260/873-74年没)の著Nawâdir al-Falâsifa³⁵⁾にも、或るギリシアの賢者の言“私は彼らの奴隷達の骨と彼らの王達の骨とを区別しようとしたが、それらは等しかったのである”として登場する³⁶⁾。Gimaretによれば、ムスリムのzuhd (禁欲)文学において、アレクサンダーを主人公にしたよく知られた逸話のテーマであり³⁷⁾、Ibn al-‘Arabîの前掲書³⁸⁾や、al-Mubashshir b. Fâtik (500/1106-07年没)の著Mukhtâr al-Hikam wa-Mahâsin al-Kilam³⁹⁾、at-Turtûshî (520/1126年没)の著Sirâj al-Mulûk⁴⁰⁾などにその例が見いだされる。また、at-Turtûshîの前掲書では、或るイスラエルの王に関する、Mâlik b. Anas (179/795年没)の伝承中にも、同様な話が見いだされる⁴¹⁾。その他、人間の頭蓋骨は、地上のはかなさの象徴として、イエスやムハマンドに帰せられる数多くの伝承に登場する⁴²⁾。

第3話は2部からなり、第1部-王子が出家して、国を去るまで-は、釈尊の4門出遊の話の翻案である。その始めに登場する3歩の逸話は仏誕7歩伝説を連想させる。そして、病人・老人・死人に出くわす話は、第4の出家者との出会いを欠くが、代わりに館の屋根を支える古いたる木との出会いが登場する。尤も、王子ブーザーサフが外出して虚弱な者や年老いた者を見た後、行者ピラウハルに出会い、行者が王子に数々の譬え話によって、教えを垂れるという、ピラウハルとブーザーサフ物語のストーリー自体に、出家者との出会いが登場している⁴³⁾。なお、Gimaretは、Abû Bakr al-Mâlikî (453/1061年没)の著al-Mujâlasaに、Bakr b. ‘Abdallâh al-Muzanî(106/723年没)からの話として、イスラエル人の王子が病人・老人・死人に出会うというエピソードが見られることを紹介しながら、この仏教伝説は、ヒジュラ暦1世紀から既に禁欲文学に加えられていたようだと言う⁴⁴⁾。

第3話の第2部-王城脱出以後-に登場する、王との会見は、マガダ国王Bimbisâraとの会見

の話を取り上げるかもしれない⁴⁵⁾。Gimaretは、この話のテーマ（ある王子が禁欲生活に専念するために結婚を拒否する）とこの話の手法（一連の譬え話）とによって、キリスト教起源のように思える数多くの教訓話、とりわけIbn al-Muqaffa' (139/757年没) に帰せられる“Farrūkhânの息子Būdhāsfの物語”⁴⁶⁾や、Ibn Abī 'd-Dunyā (281/894年没) によって伝えられた“Antūnisの物語”⁴⁷⁾、Ibn Zafarの前掲書5章にある“Ardashīsrの息子Bābakの物語”を想起させると言う⁴⁸⁾。

第3話に登場する四つの譬え話の第1、即ち死体を抱き締めて1夜を過ごす酔った王子の譬え話は、墓地や死体の光景がふんだんにあるインドの短い話の或るタイプに似ているとも言える。中国西部のTurfanで見つかったマニ教徒による古トルコ語の“ビラウハルとブーザーサフ物語”の断片と推定されるものにも、この話が登場する⁴⁹⁾。また、Ikhwān as-Safā (10世紀後半活躍) の第48書簡にも、同様な譬え話がより詳しい形で登場し、話の構成から見て、“ビラウハルとブーザーサフ物語”の一部をなすと思われる⁵⁰⁾。Gimaretは、ここにグノーシス派の着想—恐らくマニ教的なもの—を感じとるようだ⁵¹⁾。

第2の譬え話、即ち黄金ではなく毒蛇で一杯の箱を盗み、噛み殺される盗人達の話は、目下のところ不明である。

第3の、兄弟によって救出された王子が裂け目に落ちるエピソードは、この『宗教の完成』に見られる“ビラウハルとブーザーサフ物語”において、ビラウハルが既に語っている、井戸の中の人の譬え話⁵²⁾—原形は『マハーバーラタ』Mahābhārata第11書とされ⁵³⁾、Ibn al-Muqaffa'の著Kalīla wa-Dimnaの序章中に見られる“井戸の中の男”⁵⁴⁾からの借用か—を想起させる⁵⁵⁾。

第4の、難船した者達を貧り食う女羅刹（夜叉）どもの物語は、『ジャカータカ』196 Valāhassa-jātaka他、数多くの仏教説話⁵⁶⁾に類似しており、我国の『今昔物語集』巻5の1「僧迦羅・五百の商人、共に羅刹国に至る語」や、『宇治拾遺物語』91「僧迦多行羅刹国事」と同系統の話と推察される。

そして、この第3話の終わりの部分は、“ゴードマ・ブッダ故郷に帰る(帰郷説法)”を想起させる。

以上、翻訳した3話は、賢者ビラウハルが王子ブーザーサフに、懺悔は常に神に受け入れられることを教えるために語ったものである。著者Ibn Bābawayhiは、第12代イマーム al-Qā'im (Muhammad al-Muntazar, 264/878年頃没) のghayba (隠蔽) をより説得力あるものとするために、そして、『宗教の完成』を興味深いものとするために、ビラウハルとブーザーサフ物語を導入し⁵⁷⁾、この物語の前には、或るKitāb al Mu'ammārīn—Abū Mikhnaf (157/773—74年没) のものか—を利用して、ghaydaと拘る ta'mīr (超長寿) の問題を扱っている⁵⁸⁾。

蛇足になるが、第3話中の第4の譬え話のようにインド起源の話がアラビア語と日本語の作品に共通して見られる例は、この他にもあり⁵⁹⁾、最も有名なものは、主に『パンチャ・タントラ』(Pañca tantra, 五つの折ふしの知恵、5篇の教訓物語) の翻案たる、前述のIbn al-Muqaffa' によるKalīla wa-Dimnaと、我国の『今昔物語集』巻5 (天竺) と⁶⁰⁾であろう。

註

- (1) アラビア語で記された仏教関係の書物は、Ibn an-Nadīm (380/990年没) 著『目録の書』K. al-Fihrist に従えば、K. al-Budd (ブッダの書)、K. Būdāsaf wa-Bilawhar (ブーダーサフとピラウハルの書)、K. Būdāsaf mufrad (ブーダーサフだけの書) という3種(ed.G.Flügel, Leipzig, 1871,p.305)が、第2の書に関しては、Abân al-Lâhiqī (200/815-16年頃没) によるK. Bilawhar wa-Būdāsaf (pp.119,163) もある。このうち、第1のK. al-Buddは、下記のK. Bilawhar wa-BūdāsafのBombay石版に含まれている。また、第3のK. Būdāsaf mufradは、Nihāyat al-Arab fī Akhbār al-Furs wa-'l-'Arabの1章として残っている (cf.E.G.Browne, *Journal of the Royal Asiatic Society* [以下、J R A Sと略記]、1900, 216-7)。なお、Abân al-Lâhiqīのものは、韻文によるヴァージョンであるが、散佚している。
- (2) D.M.Langによれば、アラビア語版(但し、散佚している版) から、エルサレムで1956年に見つかったグルジア語版(聖十字修道院グルジア語写本No140、聖Balahvarと聖Iodasap'。ed. Abuladze, *Balavarianis k' art' uli redak' tsiebi*, Tiflis, 1957)、次いで、後者からアトスAthos山(在ギリシア)のグルジア修道院長聖Euthymius (1028年没) 一派による1000年頃のギリシア語版(聖Barlaamと聖Ioasaph)を通じて、広がっていった(“Bilawhar Wa-Yūdāsaf” *The Encyclopaedia of Islam* [以下、E Iと略記]、New edition, vol.I, Leiden, 1960,pp.1216-17; cf. D.Gimaret, *Livre de Bilawhar et Būdāsaf selon la version arabe ismaélienne*, Genève-Paris, 1971 [以下、1971と略記]、p.6-7)。なお、Jacobus de Voragine著 *Legenda aurea* 中に見られる聖Barlaamと聖Josaphatの話は邦訳がある(前田敬作他訳『黄金伝説』4, 人文書院, 1987,pp.374-97)。
- (3) D.M.Lang, *ibid.* 但し、この3点の他、部分的なものでは、Miskawayh (421/1030年没) のJāwidān Khirad (al-Hikmat al-Khālida) 中、Ādāb Buzurjmīhrのタイトルの下に記されている部分も残っている (Gimaret, 1971,p.38-41)。Halle抄略版とは、HalleにあるDeutsche Morgenländische Gesellschaftのアラビア語写本で、1099/1687-88年の筆。Muller, *Katalog der Bibliothek der D.M.G.*, II, Leipzig, 1881, I.g.9,及びWehr, *Verzeichnis der Arabischen Handschriften in der Bibliothek der D.M.G.*, Leipzig, 1940.No124を参照。同ヴァージョンの一部が、カイロの Taymūriyyaコレクション写本 Akhlāq 290にもある。このHalle抄略版の原本は、F.Hommelによって、*Verhandlungen des VII Internationalen Orientalisten-Congresses Semitische Section*, Wien, 1888, 138-62に掲載されている。E.Rehatsekによる英訳“Book of the King's Son and the Ascetic” (J R A S, 1890, 121-55)がある。Bombay石版とは、1306/1888-89年にBombayで出版された、イスラム教イスマーイールIsmā'īl派によるK. Bilawhar wa-Būdāsaf (Ibn an-Nadīmが挙げたK.al-Buddを含む) で、この版の写本では、Bombay大学イスマーイール派写本FyzeeコレクションNo.169写本1016/1607年の筆が最古。校訂本には、D.Gimaretによるもの (*Kitāb Bilawhar wa-Būdāsaf*, Beirut, 1972)があり、同じGimaretは、そのフランス語訳(上記の註2の書p.65-215)も出している。
- (4) D.M.Lang, *ibid.*
- (5) なお、ペルシア語だが、Nizām ad-Dīn ShāmīによるIkhtisār - i Kitāb - i Bulūhar u Buyūdasf (British Museumの写本Or.13214, 801-03/1398-1401年)には、以下に訳出する第3話の最後の譬え話(鬼が鳥)を除いて、すべての話が登場する (Gimaret, 1971,p.43-45)。
- (6) 但し、Ibn Bābawayhiのこの書全体に関して、本稿で利用しているのは、この四つのいずれでもなく、Parisの国立図書館写本Arabe1231 (1066/1655-56年)である。因に、本翻訳の部分は、写本の177a12から183a15までに当たる。なお、Manchester写本は、John Rylands図書館802で、Muhammad b. Hājjiの筆になる。但し、F.Sezginは後述の書で、Manch.777 (Cat.No802)としている。Berlin写本は、Ahlwardt 2721で、'Abd Allāh b. 'Alī ar-Ridā al-Khādīm al-NakhafīがIsfahanで写したもの。Teheran石版は、Muhammad 'Alī al-Kāshānīによるもの。Majlisī即ちMuhammad Bāqir al-Majlisīは12イマーム派に属し、彼のBihar al-Anwar 17巻fī l-mawā'iz wa-'l-hikam 220-44に再録されていると言われる (Gimaret, 1971,p.28)。Ibn Bābawayhiの『宗教の完成』には、その他、先に挙げたParis Arabe 1231や、Heidelberg A 287 (1095/1683-84年)など数多くの写本がある。詳しくは、F.Sezgin, *Geschichte des Arabischen*

- Schriftums*, Bd. I, Leiden. 1967, S. 548参照。Majlisīによれば、Ibn Bābawayhiのソースは、Basraのシーアは伝承学者・歴史家 al-Ghalābī (Abū' Abd Allāh Muhammad b. Zakariyyā b. Dīnār al-Jawharī al-Ghalābī al-Basrī, 294/911年没) と思われる (Gimaret, 1971, p. 32-35)。
- (7) この前に「賢者は言った」という文が抜けている。
- (8) 原語はAllāhで、唯一神を指す。それ故「いと高くおわす」「至高至大におわす」といった表現を伴うことが多い。
- (9) 原語はash-Shaytān、即ちサタンである。但しコーランでは、このように冠詞つきのshaytānは通常、アダム (Ādam) への跪拝を拒んで神 (Allāh) の呪と怒りを買うが、その処罰を最後の審判の日まで延期され、その間に地上の人間を惑わすイブリーズ (Iblīs) を指す。
- (10) 1腕尺 (dhirā') は54.04センチが一般の標準とされるが、用途・時代・場所によって48.25センチから145.6センチまで大きな幅がある (W. Hinz, "Dhirā'", EI, New edition, vol. II, Leiden, 1965, pp. 231-32)。
- (11) 'ulamā' (学者達) より ghilmān (小姓達) という読みの方を採用した。
- (12) SternとWalzerのテキストでは、khayl (馬) となっているが、バリ写本1231に見られる hīla (策略) の方を採用した。
- (13) 校訂者による補筆の部分である。
- (14) 菩薩 (Skt. Bobhisattva) のことで、アラビア語では、Yūdhāsaf, Yūdāsafともなり、ここからギリシア語のIoasaph、ラテン語のJosaphatが派生したと考えられる。話のなかではインドのShawilābattの王子となっている。Shawilābattとはカピラ城 (Skt. Kapilavastu) のことと思われる。
- (15) スリランカ (Sarandīb) の行者 Bilawhar を指すものと思われる。この Bilawhar 或は Balawhar がヨーロッパでは Barlaam となるのだが、語源はよくわかっておらず、先の Stern は、梵行者を意味するサンスクリットの brahma-cārin ではないかと言っている (*Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, vol. XXII/1, London 1959, p. 150)。
- (16) 1ディルハム (dirham) は3.148グラムの重さとも言われる (E. von Zambaur, "Dirham", EI, vol. I, Leiden, 1913, p. 979) が、ギリシアの drachmē に由来し、標準サイズの大麥の殻を取った粒50個から60個の重さのようである (G. C. Miles, "Dirham", EI, New edition, vol. II, p. 319)。
- (17) テキストは ma 'adh-kum (心せよ?) と読んでいるが、ma 'ad-kum (あなたがたの行く末) と読んだ方がよいかもしれぬ。
- (18) 原語は imām で、コーランでは「指導者」を意味し、一般に、何らかのイスラム教徒集団 (規模の大小は問わない) の指導者のことである。シーア派では特にアリーの子孫からなる最高指導者を指す場合があるが、ここでは一般的な意味を採用した。
- (19) テキストでは j. b. la となっているが、jalaba (喧噪) の誤りと思われる。
- (20) 原語は afā'in (af'an の複数) である。
- (21) 丸括弧の中は、訳者の補筆である。
- (22) 原語は tinnīn で、元は大蛇の意である (E. W. Lane, *Arabic-English Lexicon*, Book I, Part 1, 1863, London & Edinburgh, p. 318)。
- (23) 原語は ghūl で、英語の ghouls や、フランス語の goules の語源とされる。元は、種々の姿をとって砂漠に出没し、人間を道に迷わせ、死に導く存在であったようだ (E. W. Lane, 前掲書, Book I, Part 6, 1877, p. 2311)。
- (24) ここも ghilān (ghūl の複数) であるが、羅刹 (夜叉) - rakkhasa, rāksasi - どもの訳と考えられる。
- (25) 導入部分を含めると、Paris 写本1231の176b13以下である。
- (26) S. M. Stern & S. Walzer, *Three unknown Buddhist stories in an Arabic version*, Oxford, 1971, p. 4
- (27) ed. G. Flügel, Leipzig, 1871, p. 316
- (28) Tunis, 1279H/1862, p. 92
- (29) Beirut, 1968, vol. I, p. 199
- (30) "A propos de S. M. Stern et S. Walzer, Three unknown Buddhist stories in an Arabic version", *Arabica*, tome XX, Leiden. 1973 [以下、1973と略記], p. 188. イラン以西としたが、彼自身は、「近東」と

いう語を用いている。

- (31) 例えば、『千夜一夜物語』Alf Layla wa-Layla(ed. 1302H/1884, Cairo, vol. II, 258sq)や、al-Ghazālī (505/1111年没)のat-Tibr al-Masbūk fī Nasīhat al-Mulūk (Paris 3573, 9a sq)にある(Gimaret, 1973, p.188)。
- (32) 1973, p.189
- (33) Hyderabad, 1347H/1928, p.102。Wahb b. Munabbihによる話として、Dhu'l-Qarnaynが天使達の国で白い家を守る者から石を一つ受け取る。
- (34) 前掲書 p.7
- (35) Ms.Munich 651, fol.79r
- (36) 前掲書 pp.6-7。そしてSternとWalzerはインドにこうした話がある可能性を指摘する。
- (37) 1973, p.188
- (38) 前掲書 vol. I, p.459
- (39) ed.'Abd ar-Rahmān Badawī, Madrid, 1958, p.243
- (40) Cairo (Būlāq), 1289H, p.18
- (41) 前掲書 p.13
- (42) イエスがある頭蓋骨を話させる(Turtūshī, 前掲書 p.18)；ムハマンドがAbū Hurayraにごみの山に投げ捨てられた幾つもの人間の頭蓋骨を示す(Ghazālī, at-Tibr al-Masbūk, Paris写本3573,7a)。
- (43) Bombay石版(註3を参照), 31-34; Paris写本1231の 165b 16-166b 13
- (44) "Traces et paralleles du Kitāb Bilawhar wa Būdāsf dans la tradition arabe", *Bulletin d'Études Orientales*, tome XXIV, Damascus, 1972 [以下、1972と略記], p.107-11,133
- (45) SternとWalzerはブッダの王城脱出の話と一致しないことを指摘する(前掲書 p.10)。
- (46) ed. Rosen, *Zapiski Vostocnago Otdelenia* ..., XIV(1901), 77-118
- (47) tr.Rosenthal, "The tale of Anthony" *Oriens* XV(1962), 35-60
- (48) 1971, p.30; 1973, p.189
- (49) 酔った王子の譬え話のトルコ語版は、1911年にvon Le Coqによってドイツ語訳つきで出版された(Turkische Manichaica aus Chotscho, I, Abhandlungen der königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, Berlin, 1911, Abh. VI, 5-7)。
- (50) Beirut, vol. IV, 1377H/1957, pp.162-4
- (51) 1973, p.189。SternとWalzerは酔った王子の話はインド文学に見いだされないと言う(前掲書 pp.10-11)。
- (52) Paris写本1231 167b 20 ; cf Bombay石版 47-48
- (53) Gimaret, 1972, p.117-9
- (54) ed.'A.'Azzām, Cairo, 1941, pp.41-42
- (55) SternとWalzerは、第2、第3の譬え話に対するインドのモデルは知られていないと言う(前掲書 p.11)。
- (56) 岩本裕『佛教説話の源流と展開』昭和53年 開明書院 pp.305-18を参照。
- (57) Paris写本1231 162a 24-162b 3, 184b 9-185a 1
- (58) Paris写本1231 161b 20-162a 2
- (59) 『カター・サリット・サーガラ』(Katha Sarit Sagara, 「物語の川が流れ込んだ大海」の意)に由来されるとされる、『千夜一夜物語』の「王子と魔人の情婦の物語」(R.F.Burton版 602夜)と、『西鶴諸国ばなし』巻2の4「残る物とて金の鍋」(岩本裕 前掲書 pp.9-10)など。
- (60) 'Azzām版(A)の第1章中の「亀と二羽の家鴨」と、『今昔物語』(B)巻5の24「亀、鶴の教えを信ぜずして地に落ち甲を破る語」、(A)の第5章「猿と亀」と、(B)の巻5の25「亀、猿の為に謀られる語」。

〔『世界口承文芸研究』第9号 (大阪外国語大学口承文芸研究会、1987) pp.413-28 に“三つの仏教説話(1)”という翻訳を掲載した。ところが、この研究誌が9号で一旦打ち切りとなったため、続きの原稿が宙に浮いてしまった。本学口承文芸研究会の代表の一人、井本英一教授にご相談申し上げたところ、本学の論集に出したらとのご指示を受けた。そこで、9号に掲載の部分は少々手直しを加え、全体を改めて一つにまとめたのが本稿である。〕

(1990. 1. 10 受理)